

これってゆとり教育かも

山梨大学教育人間科学部准教授

尾見康博 (おみ やすひろ)

雨の降りしき中、スクールバスや車から降りる子どもたちが、次々とミドルスクールの校舎の中に入っていった。ただでさえ徒歩や自転車で通う子が少ないのに、この本降りの雨の中、自力で来る子はいないだろう。子どもたちの登校のようすを観察することは断念し、早めに受付を済ませ、受付の前で座って待たせてもらうことにした。

授業開始直前の慌ただしさは、たぶん日本の学校と変わらない。そんな中、噂に聞く“The pledge of allegiance”のつぶやきがはじまった。国家と国旗への忠誠を誓っているのだ。全米の学校の毎朝恒例の行事である。先生や職員も立ち止まってつぶやいている。ある種の宗教的威圧感がその場を覆った。

いつもきれいな出で立ちの校長が、二、三の用事を小気味よく済ませたあと、私を校長室に迎えてくれた。彼女は4人の子どもを持つ母親でもあり、一番上の子どもが高校を卒業し9月から大学の寮に入るので、寂しくなるらしい。実は、校長のこんなプライベートな情報が、毎週学校から届くメールに堂々と書かれていたりする。

前日の昼頃、明日来るのはどうか、というメールをもらい、5年緑組に入ることはわかっていた。程なくして学級担任が迎えに来てくれ、教室まで案内してくれた。生徒たちと同じ机と椅子が私のために用意されていて、クラスメートに混じって授業を受けることになった。

さて一時間目と思ったら、さっ

そく隣の教室へ移動。隣とはいっても、ホテルのCONNECTINGルームのような構造になっていて、廊下に出ずに移動。移動した先は、数学と理科の教室。理系科目二つを担当する先生の部屋でもある。

数学はプロジェクターとホワイトボードを利用して授業が進んだ。20人の生徒が個別に小さなホワイトボードを持っていて、各自その上で計算したりする。ノートというものはないのだ。

理科は教室の隅にあるカーペットに座っての授業。その間、チャイムはなく、授業の切れ目は先生が臨機応変に決めている。

三時間目は実技。今日は運動。「体育」ではないと思う。バレーボールなのだが、少し小さめのビーチボールのようなものを使って、かなりおおざっぱなルールでプレーしていた。バレーボールが得意な子にとっては明らかに退屈な内容。楽しく身体を動かし、スポーツのルールを学ぶのが目的のように思えた。

四時間目は総合みたいなもの。二人一組になり、ドラフト会議のまねごとをしている。それぞれの組の手元には、実在する野球選手の名前と年俵がポジションごとにとびっしりと記載された表。二人で相談して、ポジションごとに自分たちのチームに必要な選手を順に指名していく。条件は、総年俵4000万ドル。チームができれば、実際の試合での選手の成績によって、ホームラン1本につき2分の1点、エラーひとつでマイナス21分の1点などといった換算



Profile — 尾見康博

1994年、東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程中退。同大学人文学部助手、グリフィス大学環境科学部客員研究員を経て現職。2009年4月より、クラーク大学心理学部客員研究員。専門は社会心理学。著書は、『心理学論の誕生』（共著、北大路書房）、『心理学の実践的研究法を学ぶ』（分担執筆、新曜社）など。

表に基づき、最終的にチーム全体の総得点を競うらしい。

ランチのあとは社会。最初に入った教室で、独立戦争に至る歴史についてロールプレイみたいなことをしていた。

つぎは言語。Language Artsってのがなんかかっこよく見える。社会の時間で自分の役割について、作文するというものだった。

そして最後の時間も総合のような感じ。もうすぐ終わりだという雰囲気になりつつあり、ゆるゆるだった……。

以上、マサチューセッツ中部のミドルスクールからの報告でした。

追加ネタ。こっちの学校は、全体的にゆったりしているし、宿題も少ないです。4年生までは金曜の宿題が出ないほど。一方、3年生でも個別にポスター発表をさせることがあります。計算も低学年では概算に重点を置くなど、プラグマティックだなあと感じることもしばしば。その他諸々については<http://from-ma.blogspot.com/>もご参照のほどを。